Contents
02

4 PRACTICES FOR
SUSTAINING CRAFTSMANSHIP

（作り続けるための）

4つの実践

1 P09（竹細工） **駿河竹千筋細工協同組合**
大村 俊一・黒田倫世
丸ひごを用いた繊細な技術で
照明やインテリアへの展開を模索

2 P11（漆器） **鳥羽漆芸　鳥羽 俊行**
伝統的な駿河漆器の技法を継承しつつ、
ガラスや3Dプリントなど異素材との融合に挑戦

3 P13（木工挽物） **挽物所 639　百瀬 聡文**
「丸いものなら何でも挽く」を理念に、
OEMから自社ブランドまで幅広く展開

4 P15（染色） **お茶染め Washizu.　鷲巣 恭一郎**
静岡の基幹産業である茶業の廃棄物を活用し、
サステナブルな文脈で伝統染色を再定義

静岡の現場から見えてきた
工芸の現在形

徳川家康公の時代に全国から集った職人たちによって、多彩な工芸文化が育まれてきた静岡市。
「駿府九十六ヶ町」に端を発する高度な技術や気風は、かたちを変えながら、現代へと受け継がれています。
一方で、産業基盤はいま揺らぎを見せています。
静岡市の伝統工芸は、いま、どのような変化に向き合っているのでしょうか。
本章では、4組の作り手への訪問と対話を通じて、「作り続ける」ために行われてきた実践から、
これからの工芸の進み方を探っていきます。

INTERVIEW.01

駿河竹千筋細工協同組合　**大村 俊一・黒田 倫世**

静岡市周辺を産地とする伝統的工芸品「駿河竹千筋細工」の技術・産業振興を担う協同組合。直径0.8mmほどの細い丸ひごを一本一本組み上げる唯一無二の技法を継承し、1976年に伝統的工芸品の指定を受ける。照明・花器・器物など現代の住空間に馴染む製品開発にも取り組み、伝統技術を次世代へつなぐ活動を展開している。

名前から、ブランドをつくり直す

駿河竹千筋細工は、国指定の伝統的工芸品です。竹を細くし、角を落とした「丸ひご」を使う点、そして、それらを刺すための土台となる枠を熱で曲げ、斜め継ぎで作る点が他の伝統工芸にはない最大の特徴です。たとえ同じ技術を身につけても、静岡市内で作らなければ駿河竹千筋細工とは名乗れません。また、制作工程を分業せず、一人の職人が最初から最後まで責任を持って作り上げることも、大きな価値の一つです。
組合は設立50周年を迎え、それに合わせて名称を「静岡竹工芸協同組合」から「駿河竹千筋細工協同組合」へと変更しました。かつては竹垣などの問い合わせも多く、本来の技術が十分に伝わっていなかったためです。ブランドを正しく伝えるための、必要な決断でした。（黒田さん）

希少性と量産のジレンマ

最近はホテルや旅館、モデルルームからの注文が非常に増えています。有名飲食店からもオーダーをいただきます。オンライン販売では、作れば売れる状況ですが、制作が追いつかず在庫切れが続くこともあります。百貨店では10万円ほどするバッグや虫籠が一度に4個売れることもあり、その希少性が評価されていると感じますが、催事では場所代やマージンも大きく、売上がそのまま利益になるわけではありません。これからの課題は、まずは安定して注文に応えられる生産体制を整えること。そして、現在スタッフや職人のできる範囲で回しているSNS発信や、日々の仕事に追われて手が回っていないマーケティングなどを強化することだと感じています。（大村さん）

組合全体で若手を育てる

若手の職人はいますが、育てるのは簡単ではありません。「クラフトマンサポート制度」は役に立っており、高卒の女性が修行2年目を迎えていたり、実際に独立した女性がいたりといった成果も出ています。しかし、一人前になるには5〜10年かかります。夏でも熱で曲げる作業をし、竹の伐り出しから材料作りまで行うなど、想像以上に厳しい世界です。本気でなければ続きません。修行希望者がいても受け入れ側の親方の数に限界があったり、教える側と学ぶ側の仕事時間が重なると両者が食べていけるだけの仕事量を確保するのが難しいという現実もあります。
それでも、いまは組合の中で技術をオープンにし、後継者育成に取り組んでいます。親方が講師になり、若手と勉強会を開く。秘匿する時代ではありません。組合全体で技術を底上げし、助け合う体制ができています。
（大村さん・黒田さん）

CASE STUDY

変化に挑戦する駿河竹千筋細工協同組合のものづくり

静岡で作ることに意味がある。
四季のある環境で育った品質の高さを伝えるため、駿河竹千筋細工は技を磨き、組合で支え合い、変化の中でも土地に根ざしたものづくりを続けています。

STUDY 01 「変えない」選択

**伝統として守られてきた造形を
変えないからこその統一感ある意匠性**

伝統の造形が現代のライフスタイルにも合うため、余計な装飾を施さずとも需要が生まれる製品に。守るべき部分を変化させないからこその、統一感のある商品展開。

STUDY 02 「希少性」を価値に変える

**他にない技術だからこそ生まれる
唯一無二の存在価値**

竹を熱で曲げて継ぎ、丸ひごを穴に刺して組み立てる技法は他に類を見ないオンリーワンの技術。10万円を超える虫籠が一度に4個売れるなど、この希少性こそが評価される強みとなっている。

STUDY 03 「組織」で支え合う

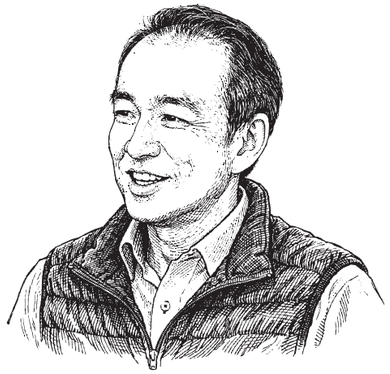
**個人技の世界から
チーム全体で育て高め合う体制へ**

かつては各職人が技を秘匿していたが、いまは親方クラスが講師となり若手と勉強会を開くなど、技術をオープンに共有している。組合全体で底上げし、助け合いながら育てる体制へと変化。

INTERVIEW.02

鳥羽漆芸 鳥羽 俊行

1958年静岡市生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業。鳥羽漆芸三代目として、伝統技法を継承しながら砂を用いる独自の「金剛石目塗」やガラス漆器などの新技術を開発。静岡漆器工業協同組合の理事も務める。現代の生活に馴染む漆器づくりを追求し、伝統と革新を融合させた活動を展開している。



“らしさ”がないことが“らしさ”？ 駿河漆器ができたワケ

もともと静岡には漆器の産業はありませんでしたが、江戸時代に三代将軍・家光による浅間神社や久能山東照宮の造営をきっかけに、全国から集められた職人たちが静岡に住み着き、技術を伝えたことが産業の始まりとされています。幕末のパリ万博出品を契機に、明治から大正には「輸出漆器」として栄え、清水港からヨーロッパなどへ大量に輸出されていました。一方で、大量生産に対応するため工程を簡略化した結果、品質が低下し、産地としての信頼を一度失うことになります。その後、各事業所が独自の塗り方を開発して立て直しを図り、現在のような多様な塗り方が存在する産地となったんです。

鳥羽漆器だからこその 表現を求めて

レースのような模様が施された漆器（右ページ写真下）は、2025年に開発した新しい表現です。塗り上げた板にレーザーでドット状に穴を掘り、その溝に漆を入れて粉をまく技法です。きっかけは、ホテルのキーホルダーでした。樹脂製のキーホルダーに漆で蒔絵を施したものの、使用頻度が高く、1年足らずで模様が消えてしまった。「掘り込めば消えないのでは」と考え、レーザー加工を試したのが始まりです。現在は模様を作るのに応用しています。ガラスへの漆塗り（右ページ写真真ん中）も同様です。当初は「漆はガラスに定着しない」と職人から反対されましたが、試行錯誤の末、金箔を下地に使うことで定着させることに成功しました。金沢の金箔職人の知恵を借りながら完成したこの技法は、いまでは主力製品のひとつになっています。

作り人を支える、 その先の仕組みづくりへ

現在の販売は、直販（BtoC）が多く、卸では市内の「駿府楽市」が大きな役割を果たしています。近年は、富裕層向けの宿泊施設やリゾートホテルからの需要も増えてきました。発信についてはSNSも活用していますが、影響が大きいのは依然としてテレビ取材で、この正月に放送された番組では、放送中から問い合わせが相次ぎました。昔のように問屋が機能していないいま、メーカーとしての制作に特化し、販売や知識の伝達は専門のところに委託できるような、新しいサプライチェーンの形が必要ではないでしょうか。
また、静岡市には「クラフトマンサポート制度」があり、鳥羽漆芸にもこの制度を通じて入った若手がいます。一方で、支援期間が終わると事業所が雇いきれず、半ば独立を余儀なくされるケースも少なくありません。制作から販売までを一人で担うのは負担が大きく、生産性も下がってしまいます。
こうした現状からも、作り手が制作に専念できる仕組みが必要だと感じます。作り手を支えるだけでなく、「使い手の後継者」を育てていくことも、これからの産地にとって欠かせない視点ではないでしょうか。

CASE STUDY

鳥羽漆芸の変化に挑戦するものづくり

「伝統産業も、かつては最先端だった。その時代の技術を使うのが本来の姿だ」。鳥羽さんは生前の父の言葉を受け継ぎ、迷いなく新しい技術を取り入れ、ものづくりに挑み続けています。

STUDY 01 「現代の暮らし」を眼差す

それは本当に現代の食卓に馴染むのか？ 問いから生まれた新技術

開発中の「乾漆（かんしつ）漆器」。
現代の食卓には漆のツルツルとした質感が馴染まないかもしれない、という仮説から開発をスタートした、砂と漆を混ぜて塗る独自技術。

STUDY 02 「和」の強みを活かす

「いまあるものよりちょっとだけ良い」 くらいのバランスがロングセラーの秘訣

和紙を底面に貼り付けたグラス。
漆だけでなく和紙職人との伝統工芸同士の掛け合わせた、海外客の日本文化への関心をうまく捉えた製品。色彩には年のトレンドなども意識するとのこと。

STUDY 03 先端技術を「調和」させる

伝統産業はいままでもこれからも 時代の新技術を取り入れて変化する

レーザーカット技術を応用した製品。
伝統的な「沈金」という技法をデジタル化し、手では描けないような精密な幾何学模様やドット柄を作ることが可能に。

INTERVIEW.03

挽物所639 百瀬 聡文

1983年静岡県生まれ。静岡デザイン専門学校卒業。
2011年に「挽物所 639」を創業。伝統的な挽物技術を継承しながら、他技法との融合による新たな表現を追求。2016年に LEXUS NEW TAKUMI PROJECT の静岡県代表に選出。併設のギャラリーを通じて、挽物の可能性を国内外へ広げる活動を続けている。

仕事は「安定・発信・革新」の三本柱

いまの仕事は三つの柱で成り立っています。一つ目は家具脚などを数百本単位で作る加工の仕事。売上の約6割を占める安定の柱です。二つ目は自社製品の開発。世界観を伝えるための発信の仕事。そして三つ目が、クリエイターとのコラボなど技術を高めるための仕事です。
昨年は2mの大物アート作品群や直径40cm以上の大物アート作品が売れ、製品比率が高まりました。「解釈の余白がある、自由に楽しめるものを置きたい」という方が買ってくださる。そういう出会いも面白いですね。

人と組むことが武器になる

自分は、人と組むのがとても好きなんだと思います。デザイナーさんが来たら、まずは泊まってもらう。職人が作った料理とお酒でもてなし、深いコミュニケーションを取ることを大切にしています。そこで「よっしゃ、一緒にやろうか」という関係ができるんです。インテリアライフスタイル展も自費で出ました。外とつながることで、工房の熱量が上がるんです。

工房の限界を更新した異業種との共創

2019年、ANREALAGE 森永さんとの共同制作で、2～3メートルの巨大なライダースジャケットを平安神宮で展示しました。巨大ですが、実際に着用もできる構造になっています。森永さんから「“動く木製チャック”を作るなら君と組みたい」と言われ、制作に挑戦しました。YKKのチャックの構造を分解して研究しましたが、数ミリ違うだけで噛み合わない。精密で大変な作業でしたが、最終的にはガラガラと音を立てて動くものができました。自分でも誇れる仕事です。
その後も2020年の秋冬パリコレクションでも森永さんとコラボさせていただき、300%サイズの大きなハンガーや、積み木をテーマにしたヒール部分のパーツ、ランウェイ用のピアスなどを制作しました。ファッション業界の速さに触れることは、自分たちのものづくりのスピードと精度を更新する経験になりました。

走り続ける工房を作る

現在は自分を含め4人で、生産能力も上がってきました。職人たちのための一軒家の社宅「ノイエ」も借りています。今後は作り手だけでなく、マーケティングや営業ができる人材も必要だと感じています。静岡は工芸への支援にも恵まれた環境ですが、今後はさらに産地全体を盛り上げるような支援を期待しています。だからこそ、自分たちが先頭を走り、周りが「自分たちも頑張らなきゃ」と思えるような流れを作りたいですね。

CASE STUDY

変化に挑戦する 挽物所 639 のものづくり

「人と組むことや人と話すことがむちゃくちゃ好き」と語る百瀬さん。
率先して異業種とコラボレーションすることで、伝統技術のスピードや精度、作れるものの幅を大きく広げています。

STUDY 01

人と「深く」つながる

人と話し、組む楽しさを ものづくりの質へと転換

共創において大切にしているのは、デザイナーとともに過ごし、食事をして深いコミュニケーションをとること。「一緒に頑張ろう」と思える信頼関係と高い熱量を生む。

STUDY 02

業界の「常識」を打ち破る

ファッション業界との共創が ものづくりの精度を更新するきっかけに

アンリアレイジ・森永邦彦氏との共同作品「300%ライダーズジャケット」。前面に施されたファスナーなどの制作を通して、木という素材の可能性が新たに引き出された。

STUDY 03

「収益性と成長性」の両立

共創を通じた技術革新があるからこそ 受注仕事の幅も広がる

OEMとして受注する「安定の仕事」、自社オリジナル製品を見せる「発信の仕事」、クリエイターとの共創による「技術革新の仕事」のバランスは、収益性・成長性両軸を加速させている。

INTERVIEW.04

お茶染め Washizu.　鷲巣 恭一郎

1979年生まれ。「鷲巣染物店」の五代目。
伝統技法「駿河和染」を継承する傍ら、静岡特産の茶を染料とした「お茶染め」を確立。廃棄される茶殻等を活用した、産地の風土を色に込める活動を展開。地場産業と現代のライフスタイルをつなぐ、新たな染色の可能性を追求している。

継ぐつもりはなかった家業を現代のかたちに昇華

私は明治時代から続く「鷲巣染物店」の5代目です。もともと家業を継ぐつもりはなかったのですが、父が病気で亡くなったことをきっかけに、23歳で家業に入ることを決めました。
当時は、周囲から「もう廃業だろう」と思われていた時期です。産地の職人さんや材料屋さんに助けられながら、一つひとつ技術を覚えてきました。現在では、静岡の伝統工芸「駿河和染」の型染め技術をベースに、お茶染めを行っています。

お茶染めに込めた静岡らしい循環のかたち

お茶染めは、緑茶に限らず、ルイボスティー、紅茶、抹茶など、いろいろな種類を使うことができます。さらには製茶工場で出る茎や粉など、あらゆる副産物が利用可能です。私のものづくりの最大の特徴は、製茶の過程で廃棄されるお茶の葉を染料として再利用し、煮出した後の茶殻は堆肥として畑に戻すというあり方です。ものを作って終わりではなく、産地の中で循環していく仕組みを大切にしたいと考えています。実際の売り上げの多くは、企業からの受託生産や、お客様が持ち込んだ衣類の染め直しが占めていますが、「お茶染めで何ができるのか」を知ってもらう入り口として、手ぬぐいやTシャツ、バッグなどの販売にも力を入れています。

「使うための工芸」から表現としての工芸へ

作品としての制作を始めたのは、ここ3年ほどです。それまでは職人として、「誰もが使えるもの」を作ることに徹してきました。ですが、職人の先輩方との関わりの中で作品を制作する機会があり、そこで評価をいただいた経験が自身の活動の推進力となって表現としての染めにも向き合うようになりました。いまでは、日々の仕事とは別に、ライフワークとして作品づくりを続けています。

お茶染めを文化として根づかせるために

目指しているのは、「お茶染めを文化にする」こと。「服が汚れたから、お茶染めしよう」と、日常の会話の中で自然に口にされるような状態を作りたいと思っています。
現在は3名体制で、将来の独立を見据えた自営業的な関係で一緒に仕事をしていますが、これからは組織化を進める第2フェーズに入ります。茶畑への収益的な還元も含めた仕組みを確立させていくためにも、安価な布小物だけでなく、工芸としての技術をしっかりと見せられる高単価な製品を、安定して量産できる体制を整えていきたいんです。収益を安定させ、次の担い手を育てられる循環を作ることがいまの挑戦です。

CASE STUDY

変化に挑戦する お茶染め Washizu.のものづくり

廃業や高騰により、蒸し器や刷毛、型紙など、
道具や原材料の確保が年々難しくなってきているなか、
鷲巣さんは新しい表現方法で和染の技法を継承しています。

STUDY 01

資源の「循環」を目指す

茶葉全てが染色素材になるのを目指した下処理や染色方法の研究

廃棄される茶葉を染料に、煮出した茶殻を堆肥化して畑に還元。製茶工場で出る茎や粉など、あらゆる副産物が利用可能。資源の循環という仕組みをデザインし、一歩進んだブランドに。

STUDY 02

「お茶文化」としての工芸

静岡の茶畑そのものに価値を還元できる取り組みを目指して

自身の工芸品を「お茶」という文化の一端だと捉え、飲むだけではない新しいお茶の体験を生み出す。多様な作り手とともに静岡の茶畑に付加価値をつけるためのアプローチを模索中。

STUDY 03

「自社の顔」となる意匠性

草間彌生といえば水玉、お茶染めといえばお茶畑柄

製品の多くは象徴的なチャコールグレーと黄土色のツートンカラー。上空から見た茶畑をモチーフにしたパターンは意匠のトーンが統一されており、Washizu.の製品であると一目でわかる。